楽毅論（1）

「楽毅①論

世人多以楽毅不時拔莒即墨一論之。

楽毅論。

世人多くは楽毅が時に莒、即墨を抜かざるを以て之を論ず。

夫求古賢之意、宜以大者遠者先之。必迂廻而難通、然後已焉可也。

夫れ古賢の意を求むるは、宜しく大なる者遠き者を以て之を先にすべし。必ず迂廻して通じ難く、然る後に已むは焉可なり。

楽毅論

世人の多くは、楽毅が好機にありながら莒と即墨の二城を攻略しなかったことをもって、楽毅についてあれこれと論ずる。*1

だが古の賢人の真意を知ろうとするならば、少くとも大所高所よりこれを判断すべきであろう。どんな場合でもそうした高遠な見地に一度は立ってみるべきであり、それでも判然としないならそれはやむを得ないといえるだろう。

*1 楽毅（生歿年不詳）は戦国時代の武将で、その伝は、司馬遷「史記・楽毅列伝」に詳しい。その「太史公自序」に「率行其謀、連五国兵、為弱燕報彊齊之讎、雪其先君之恥」（はかりごとを実行して五ケ国の兵を連合し、弱燕の為に強斉に報復してよくその先君のうけた恥をそそいだ）とあるように、楽毅は燕の昭王の招請に応じ、強大傲慢な湣王の率いる斉を伐たんとして、趙・楚・韓・魏・燕の五国連合軍の総大将となった。そして済軍を済水の西に打ち破り、諸侯の軍が引きあげるなか、燕軍・楽毅のみは斉の国都臨菑に迫り、それから五年の間に斉の七十余城を降伏させた。とどとくを失った。夏侯玄によるこの「楽毅論」は、以上の事情を踏まえたうえで書かれたものである。「史記」の記す楽毅の伝については「解説」を参照。

なお夏侯玄の「楽毅論」は「芸文類聚・品藻」や「史記」の「集解」などに所収されており、王羲之の書したといわれる当「楽毅論」とは若干の字句の異同がある。

【参考文献】二玄社 中国書法選十一 魏晋唐小楷集
マール社 書聖名品選集四 王羲之 楽毅論・黄庭経・東方朔画讃・孝女曹娥碑

楽毅論（2）

「今②樂氏之趣、或者其未盡乎。而多劣之、是使前賢失指於將来。不之惜哉。觀樂生遺燕惠王書、其殆庶乎機合乎道、以終始者與。其喻昭王曰、伊尹放大甲而不疑、大甲受放而不怨。

今楽氏の趣、或ひは其れ尽くさざるか。而して多く之を劣るとするは、是れ前賢をして指を将来に失せしむ。亦惜しからずや。楽生が燕の恵王に遺れる書を観るに、其れ殆んど機に庶く道に合して以て終始せる者か。其の昭王を喩すに曰く、伊尹大甲を放ちて疑はず、大甲放を受けて怨まずと。

現在、楽毅の抱いていた考えは、おそらく十分に理解されていないのではあるまいか。多くの者が楽毅を劣る者としているのは、まさしく前代の賢人の真情を将来に誤り伝えることである。全く残念でならない。

楽毅が燕の恵王に送った手紙[*1]を見ると、それは好機であると同時に道にも合致させようと（腐心）する、ほとんどそのことに終始しているのではないかと思われるのだ。[*2]昭王をさとす楽毅の言に、「伊尹は迷うことなく太甲を追放し、放逐された太甲も恨むことはなかったのです。[*3]」とある。

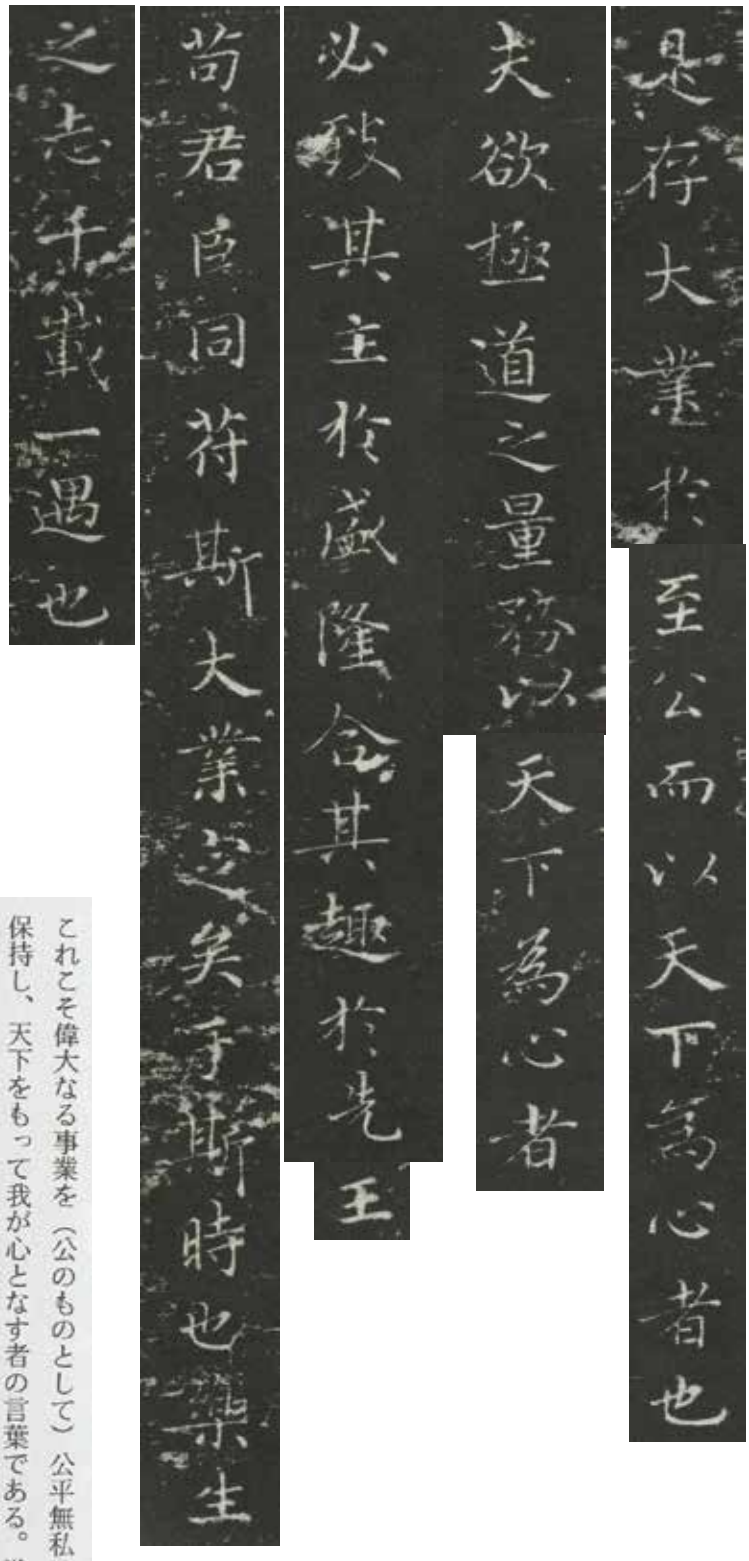
【参考文献】二玄社 中国書法選十一 魏晋唐小楷集
マール社 書聖名品選集四 王羲之 楽毅論・黄庭経・東方朔画讃・孝女曹娥碑

*1 太子時代より楽毅の言行に疑惑を抱いていた燕の恵王は、即位するや敵将田単の放った反間（スパイ）のデマ――「斉の城で降伏していないのは二城に過ぎない。攻略しようと思えばいとも簡単なのにそれをしないのは、楽毅が燕の新王と折合いが悪く、兵を斉に暫く留め、南面して斉の王になる野心があるからだという話がもっぱらだ。斉としては、楽毅が他の者と交替しないか、それだけが心配だ。」（「史記」）――を信じてしまい、前述したように楽毅の代りに騎劫をたてて斉の前に大敗を喫したのである。楽毅は殺害を怖れて趙に投降した。趙は楽毅を厚遇し、それをもってしても心を改めることがなかったのです。私は身は罪過より免かれ、功を立てて先王の遺業を明らかにするのが最上と考える者です。讒言中傷を受け、先王の名をおとしめることを最も恐れるのです。ここに思いもよらぬ罪に出くわし、僥倖をたのんで私利とするなど、義として私のなしうることではありません。「古の君子は交りを絶つにも悪声を出さず、忠臣は国を去るともその名を潔うせず」と聞いております。）としたためている。楽毅は遂に燕には戻らず趙で歿したが、恵王は楽毅の子、楽間を昌国君に封じた、と「史記」は記している。

*2 「史記・集解」によればこの部分は、「観楽生遺燕恵王書、其殆庶乎知機合道、以礼始終者与。」（好機であると知りながら同時に道にも合致させ、礼を守ることに終始したと言ってよいのではないか。）となっている。

*3 「書経・太甲篇」、「史記・殷本紀」などによれば、殷の賢臣伊尹は、即位間もない湯王の孫太甲が無道であったため、これを三年間桐宮に追放した。太甲は「王徂桐宮居憂、克終允徳」（王は桐宮に行き、憂いのうちに暮していたが、その間に本当の徳を身につけた。「書経」）とある故事に基づく。

楽毅論（3）



是③存大業於至公、而以天下爲心者也。夫欲極道之量、務以天下爲心者、必致其主於盛隆、合其趣於先王。苟君臣同符、斯大業定矣。于斯時也、樂生之志、千載

是れ大業を至公に存し、而して天下を以て心と為す者なり。夫れ道の量を極め、務めて天下を以て心と為さんと欲する者は、必らず其の主を盛隆に致し、其の趣を先王に合す。苟くも君臣符を同じうすれば、斯に大業定まれり矣。斯の時に于てや、楽生の志は千載一遇なり。

これこそ偉大なる事業を（公のものとして）公平無私に、保持し、天下をもって我が心となす者の言葉である。道徳を窮め尽し、天下のことのみを我が心となそうとつとめる者は、必ずやその主君の業を隆盛に導き、ひいてはその真意を先王の善政と結び交すに致らしめるものだ。主君と臣下の思いがこのように合致するならば、ここに偉大なる事業は定まったといえるだろう。
この時、この瞬間、楽毅の志は千載一遇（千年に一度）の好機を得たのである。[*1]

二頁 *1 「史記・集解」は、「楽生之志、千載一遇。夫千載一遇之世、亦将行千載一隆之道」としている。

【参考文献】二玄社 中国書法選十一 魏晋唐小楷集
マール社 書聖名品選集四 王羲之 楽毅論・黄庭経・東方朔画讃・孝女曹娥碑

楽毅論（4）

亦④將行千載一隆之道。豈其局蹟當時止於兼并而已哉。夫兼并者、非樂生之所屑。彊燕而廢道。又非樂生之所求也。不屑苟得、則心無近事。不求小成、斯意兼天下者也。

亦将に千載一隆の道を行はんとす。豈其の当時に局蹟して兼并するに止まるのみならんや。夫れ兼并は、楽生の屑しとする所に非ず。燕を彊くして道を廃するは、又楽生の求むる所に非ざるなり。苟くも得ることを屑しとせざるは、則ち心は事に近づく無し。小成を求めざるは、斯れ意は天下を兼せんとする者なり。

また、この時にあたって、千年に一度あるかないかの王道を実現しようとしたのである。彼は、外面的状況だけにとらわれて領土拡大だけを求めていたのでは決してない。そもそも自国の領土の拡大など楽毅の眼中にはなかったのである。そんなことは彼の目的ではなかった。燕を強国にして（そのために）道徳をないがしろにすることは彼の志に背くことである。そのような目先の利得に動かされることがないのは、彼の心意が卑近な外面的状況にはないからである。卑小な成功など意に介さないのは、天下を統一せんとする志を持ち合わせていたからだ。

【参考文献】二玄社 中国書法選十一 魏晋唐小楷集
マール社 書聖名品選集四 王羲之 楽毅論・黄庭経・東方朔画讃・孝女曹娥碑

楽毅論（5）

「則⑤舉レ齊之事所レ以運二其機一而動レ四海一也。夫討レ齊以明二燕主之義一、此兵不レ興二於爲レ利矣。圍レ城而害不レ加二於百姓一、此仁心著二於遐邇一矣。舉レ國不レ諜二其功一、除レ暴不レ以二威力一、此至德全二於天下一矣。

則ち斉を挙ぐるの事は、其の機を運らして四海を動かす所以なり。夫れ斉を討ちて以て燕主の義を明らかにするは、此れ兵を利の為に興さざるなり矣。城を囲みて害を百姓に加へざるは、此れ仁心の遐邇に著はるなり矣。国を挙げて其の功を諜らず、暴を除くに威力を以てせず、此れ至徳を天下に全ふするなり矣。

つまり斉を伐つということは、その機をつかまえて天下を動かすという意図があってのことなのだ。
そもそも斉を討伐して燕国王の義を明らかにしたのは、もとよりひとり燕国のためだけの出兵ではなかったということだ。城を包囲しても、人民だけには危害を加えぬ。それによって仁心を内外に明示したのである。国を攻略してもそれで事足りることなく、横暴を排除するのに（対抗的な）威力を用いない。それでこそ至上の徳が天下に全うされるのだ。

【参考文献】二玄社 中国書法選十一 魏晋唐小楷集
マール社 書聖名品選集四 王羲之 楽毅論・黄庭経・東方朔画讃・孝女曹娥碑

楽毅論（6）

邁⑥全レ德以率ニ列國一、則幾ニ於湯武之事一。□樂生方恢ニ大綱一、以縱ニ二城一、牧レ民明レ信、以待ニ其弊一、使ニ即墨莒人一顧ニ仇其上一、願レ釋ニ干戈一、賴レ我猶レ親、善守レ之、智無レ所ニ之施一。

邁めて德を全ふし以て列国を率ふるは、則ち湯武の事に幾し。楽生方に大綱を恢くして、以て二城を縱し、民を牧し信を明らかにし、以て其の幣るるを待ち、即墨、莒の人をして、仇を其の上に顧み、干戈を釈かんことを願ひ、我に頼ること猶ほ親のごとくならしめ、善く之を守らば、智も之を施こす所無し。

全力をあげて徳を全うし、列国を率いるその姿勢は、古の聖王たる湯王・武王にも比すべきものである。その姿勢において極めて近似しているのだ。

楽毅は、仁愛の心をもって大綱を寛くして二城を放置し、その深い誠実さによって人民を治め、（その結果として の）疲幣を待ったのである。（疲幣とは、つまり）即墨、莒の人民をして、その支配者を仇敵と思いなさしめ、武装解除を願わせて、自国（燕）を頼ることあたかも親のごとくなさしめることであり、この原則に徹する限り、（敵将田単の）智略をもってしてもいわんともし難かったのである。

【参考文献】二玄社 中国書法選十一 魏晋唐小楷集
マール社 書聖名品選集四 王羲之 楽毅論・黄庭経・東方朔画讃・孝女曹娥碑

楽毅論（7）

⑦然則求仁得仁、即墨大夫之義也。任窮則從、微子適周之道也。開彌廣之路、以待田單之徒、長容善之風、以申齊士之志、使夫忠者遂節、通者義著、昭之東海。屬之華裔、(我)澤如春、下應如草、道光宇宙、賢者託心、鄰國傾慕、四海延頸、思戴燕主。

然らば則ち仁を求めて仁を得るは、即墨大夫の義なり。任窮すれば則ち従ふは、微子の周に適くの道なり。弥広の路を開きて、以て田単の徒を待ち、善を容るるの風を長じて、以て斉士の志を申べ、夫の忠者は節を遂げ、通者は義を著はし、之を東海に昭らかにし、之を華裔に属さしめば、我が沢は春の如く、下の応ずるは草の如く、道は宇宙を光し、賢者は心を託し、隣国は傾慕し、四海は頸を延べて、燕主を戴かんことを思はん。

そうであればこそ、「仁を求めて仁を得る」[1]のは即墨大夫のとるべき唯一の道である。行き場に窮した時、とるべきは微子が周に赴いた道であろう。[2]
楽毅は門戸を開いて田単[3]の軍（の投降を）待ち、善をうけいれる姿勢を強く打ち出して、臍屈を余儀なくされた斉の人士の志をまっすぐに伸ばしめようとしたのである。忠義の者には節操をとげさせ、道理に精通する者には義が顕著であるようにさせ、（各々の志を遂げさせることによって）東海の地[4]、斉にその意趣を明らかにし、天下の内外に及ぼさしめれば、即ち我が燕の恩沢は春の到来のごとく人民に行きわたり、その敬慕してやまぬ姿は草のなびく様にも似たものである。道徳は全世界を照らし、賢者も心を燕に委ね、隣国は言うに及ばず、天下はこぞって燕を慕い、頸をのばして燕の主君を上に戴かんと願いもしよう。

【参考文献】二玄社 中国書法選十一 魏晋唐小楷集
マール社 書聖名品選集四 王羲之 楽毅論・黄庭経・東方朔画讃・孝女曹娥碑

楽毅論（8）

⑧仰望風聲、二城必從、則王業隆矣。雖淹留□兩邑、乃致速於天下。不幸之變、世所不留。敗於垂成、時運固然。

風声を仰望して、二城必らず従はば、則ち王業隆んなり矣。両邑に淹留すると雖も、乃ち天下を速くことを致さん。
不幸の変は、世の図らざる所なり。成るに垂んとするに敗れたるは、時運固より然り。

燕のこのようなあり方を思慕して、二城がもし従うならば、王業はここに盛隆し、成就したと言えるであろう。この両邑攻略に長時間をかけているとはいえ、その間に天下を招きよせていただろうから。
しかし不幸な変乱[*1]は思いもかけぬ時にやって来る。まさに王業が成就せんとする時に、敗れ去ったのは、時の運がもともとそうであったと言うほかはない。

＊1　楽毅の失脚に続く、燕の敗北を指して言う。

【参考文献】二玄社 中国書法選十一 魏晋唐小楷集
マール社 書聖名品選集四 王羲之 楽毅論・黄庭経・東方朔画讃・孝女曹娥碑

楽毅論（9）

「若⑨乃逼之以威、刦之以兵、則攻取之事。求欲速之功、使燕齊之士流血於二城之間。侈殺傷之殘、示四國之人、是縱暴易亂、貪以成私、鄰國望之、其猶豺虎。

若し乃ち之に逼るに威を以てし、之を刦かすに兵を以てするは、則ち攻取の事なり。速かならんと欲するの功を求め、燕斉の士をして血を二城の間に流さしめ、殺傷の残を侈りて、四国の人に示さば、是れ暴を縦ち乱に易へ、貪りて以て私を成さば、隣国の之を望むこと、其れ猶ほ豺虎のごとくならん。

（楽毅の真意は次のようなものであった。）もし二城に対して威力をもって圧迫し、兵力をもって強迫したならば、所詮それは攻めて奪うことに過ぎなくなる。功を急いで求め、その結果として燕・斉両国の士人をして二城の間に流血の事態を招き、残酷な殺傷の様を四隣の国人に見せつけたらどうなるであろうか。燕は暴をもって残虐をほしいままにするとみなされるであろう。私利を貪るならば隣国はその行為を血に飢えた無慈悲な豺（やまいぬ）や虎のごとき所業とみなすであろう。

【参考文献】二玄社 中国書法選十一 魏晋唐小楷集
マール社 書聖名品選集四 王羲之 楽毅論・黄庭経・東方朔画讃・孝女曹娥碑

楽毅論（10）

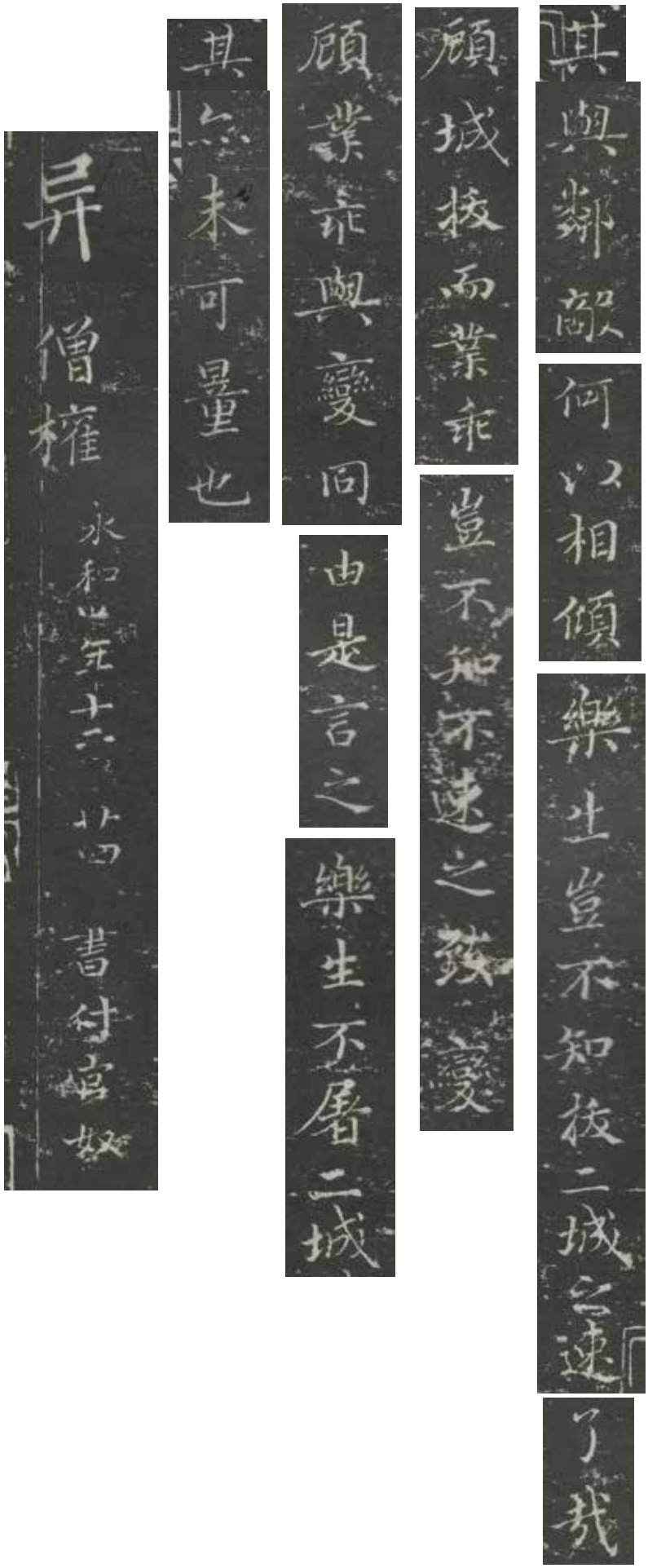
既⑩大墮稱兵之義、而喪濟弱之仁。虧齊士之節。濂廉善之風、掩宏通之度、棄王德之隆。雖二城幾於可拔、霸王之事逝其遠矣。然則燕雖兼齊、其與世主何以殊哉。

既に大いに兵を称ぐるの義を堕し、而して弱を済ふの仁を喪ふ。斉士の節を虧き、廉善の風を廃し、宏通の度を掩ひ、王徳の隆を棄つ。二城は抜くべきに幾しと雖も、霸王の事は逝きて其れ遠し矣。然らば則ち燕は斉を兼すと雖も、其れ世の主と何を以て殊ならんや。

そうなればもはや挙兵の大義は失墜し、弱者を救済するという仁心も喪失することになる。斉の人士の節操も欠くことになり、清廉な気風もすたれてしまう。広大な度量もかくれてしまい、王者の徳の隆盛を放棄することになるのだ。二城をほぼ攻略できたとしても、覇王の事業は遥か遠くに去ってしまうであろう。それゆえ、（そういう仕方で）燕が斉を併呑したとして、世上一般の主君とどこに異なるところがあろうか。

【参考文献】二玄社 中国書法選十一 魏晋唐小楷集
マール社 書聖名品選集四 王羲之 楽毅論・黄庭経・東方朔画讃・孝女曹娥碑

楽毅論（11）



其⑪與鄰敵、何以相傾。樂生豈不知拔二城之速了哉。顧城拔而業乖。豈不知不速之致變。顧業乖與變同。由是言之、樂生不屠二城、其亦未可量也。

昇僧權　永和四年十二月廿四

其れ隣敵と何を以て相ひ傾けん。楽生豈二城を抜くの速了なるを知らざらんや。城を抜きて業の乖かんことを顧ふ。豈速かならざるの変を致すを知らざらんや。業乖かば変と同じきを顧ふ。是に由りて之を言はば、楽生の二城を屠らざりしは、其れ亦未だ量るべからざるなり。

永和四年十二月廿四。

昇僧権。

隣国にしても何を根拠に燕に対して心を寄せることがあろうか。

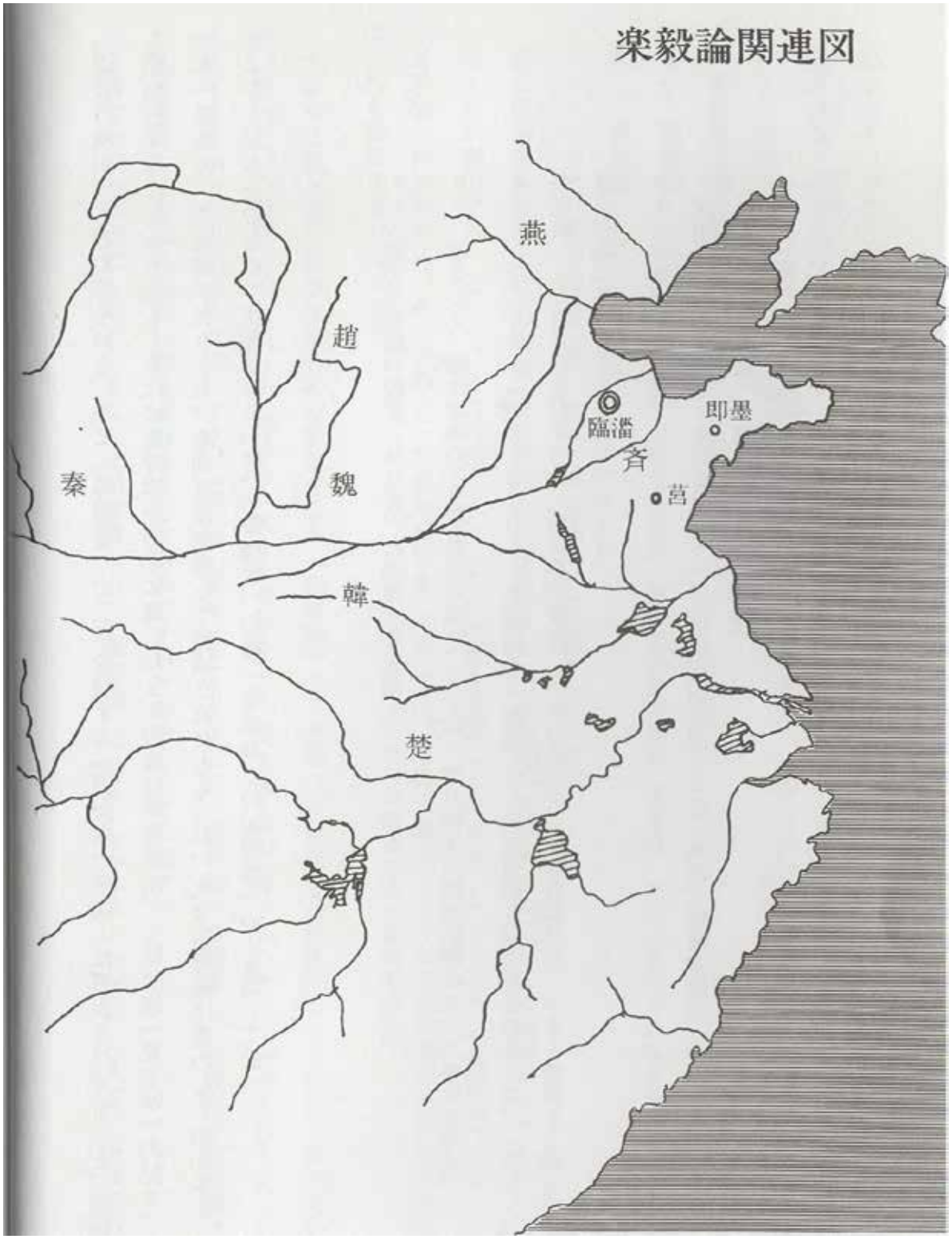
楽毅は、どうすれば二城を速やかに攻略できるか知らない筈はないのである。徒らに城を攻略して、道義に背反することを顧慮したのだ。また速やかに攻略しなければ、不測の変乱を生ずることも知らない訳ではなかったのだ。ただ業が道義に背反すれば、変乱と何ら変ることがないのを顧慮していたのだ。

以上の事から考えあわせると、楽毅が二城を滅ぼさなかった本当の真意は、とうてい（余人には）測り知ることのできぬ深いものがあると言わねばならない。

永和四年（三四八年）十二月二四日。

【参考文献】二玄社 中国書法選十一 魏晋唐小楷集
マール社 書聖名品選集四 王羲之 楽毅論・黄庭経・東方朔画讃・孝女曹娥碑

楽毅論（12）



【参考文献】二玄社 中国書法選十一 魏晋唐小楷集
マール社 書聖名品選集四 王羲之 楽毅論・黄庭経・東方朔画讃・孝女曹娥碑